

〈はじめに〉

昨年、「赤ちゃんの取り違え」が、幾度かニュースとして取り上げられました。ひとつは、実際の出来事として、もう一つは映画祭で賞を獲得した映画のテーマとして。現実のニュースの方の概要は、出生直後に病院で取り違えをされた男性が、50数年後に本当の両親がわかった、というものでした。◆もしかしたら自分は両親の本当の子どもではないのではないか…これらのニュースに接して、このような疑念が、ふと心をよぎった人は多いのではないのでしょうか。それは、生物学的な系譜に対する不安ですが、その根底には、「自分は誰なのか」、さらには「“自分”とは何なのか」という問いが、絶えずあるからだと思われれます。◆私たちは、日常生活のほとんどの時間を、環境に溶け込み自分を忘れて過ごしています。でも、その中で時々、自分という意識が浮かび上がって来ることがあります。無意識に行っていた作業が滞り、ふと手を止めるとき。また、病気や怪我の痛みが体にあるとき。そんなとき、いつもは忘れていた自分が心に現れます。健康が意識に昇りにくいように、自分が意識されている状態がずっと続くというのは、あまり心身にとって健全ではないのでしょう。けれど人間は、進化の過程で、「自分」という意識を持つ生き物になってしまいました。そのことは、文化という宝物を私たちにもたらしましたが、それと共に、それまでは持つことのなかった悩みや苦しみが、私たちの心の中に生まれました。◆今回のテーマは「自分」です。発達障害の子どもが多くが、自己認識が未熟であり、そのことが、社会生活において、思わぬトラブルを招くこともあります。自己認識の問題について分析し、できることならば、その発達を援助したい、と思います。でも、やはりもうひとつ考えておかなければいけないのは、より高度な「自分」という意識が生じるほど、それまでは抱かなかった感情や思考が芽生えて来る、という問題です。それらは、公共心や正義のような高度な心を子どもにもたらすとともに、コンプレックスや不全感など、自分に対するネガティブな感情も、必ず引き起こすはずで、人は能力が高まると、それゆえの悩みも深くなる。そのことを忘れずに、療育に携わる必要があると思います。◆「自分」という意識や認識は、社会との関わりの中で育ち、そして私たちがいま、「自分」と感じているものも、その中のみ存在するのではないか。というのが、最近の個人的妄想です。宮澤賢治がその詩の中で、「わたくしという現象は仮定された有機交流電燈のひとつの照明です」と表現したように、生きものとしての命がある間だけ、他者や社会との交流の中で、点いたり消えたりしながら、灯り続けているもの、それが「自分」なのではないか。今回の「自己認識」は、“自分とは何か”という解けない謎につながるテーマでもあります。その問題についても、少しだけ、考えてみたいと思っています。